

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第34巻 第4号



資料提供：巢守 関次郎氏

白山麓の風景—アジメドジョウの熟れ鮎

白山麓ではイワナやゴリなどを捕獲して、さまざまな保存方法と食べ方があることが知られていますが、ほかに「なまれ鮎すし」にして食べる方法があります。滋賀県琵琶湖地方のフナの「熟れ鮎」は有名ですが、両白山地の南部に位置する石徹白川流域（福井県旧和泉村）には溪流魚の一種、アジメドジョウを「熟れ鮎」にして食べる珍しい方法があります。独特の仕掛けで捕獲したドジョウをいったん塩漬にした後、米と合わせて発酵させて食べるのです。酒のつまみにあった味わい深い食べ物です。「熟れ鮎」は遥か昔に稲作とともに大陸から伝わったと言われていますが、白山麓で今に伝わっている伝統的な食文化は、貴重な文化遺産の一つではないかと思われます。（林 哲）

平成 18 年豪雪と 白山のクロユリの開花の遅れ

野上 達也 (白山自然保護センター)

今年、2007 年は記録的な暖冬で日本の平均気温は統計を取り始めた 1988 年以降で最も高く、降雪量 (12 月～2 月) も北陸地方では平年の 9%になるなど雪も非常に少ない年になっています (気象庁)。しかし、昨年、2006 年は 2005 年 12 月からの大雪で、平成 18 年豪雪と名づけられているように、非常に積雪の多い年でした。詳しくは、竹井 巖さんの「この冬に白山山麓に降った雪」(『はくさん』第 34 巻第 1 号) でも紹介されています。豪雪の影響を受け、白山の登山口、別当出合へ続く道路も市ノ瀬までの開通が 6 月 2 日、別当出合までの開通が 6 月 23 日に、市ノ瀬ビジターセンターの開館が 6 月 2 日と例年よりも 1 か月も遅い時期となってしまいました。また、白山山頂部でも雪どけの遅れのため、高山植物の開花も遅くなっていました。今回は、白山山頂部付近で実施している雪どけやクロユリの開花調査についてご紹介したいと思います。

なお、2005 年の白山のクロユリの開花状況については、当センター発行の白山の自然誌 26『白山のクロユリ』で紹介しています。また、2006 年の状況については、そのつどインターネットでも紹介してきました。



2006 年の白山山頂部の雪どけとクロユリの開花状況

白山山頂部に調査地点を設け、その地点の雪どけの日を推定するとともに、その地点のクロユリの開花状況を調査しました。雪どけの日は、地表面に温度センサーを設置して計測し、雪どけすると、それまでほぼ 0℃で推移していた温度に変化が見られるようになることから推定しました。地表面の温度がほぼ 0℃で推移していることについては、「白山室堂平の気温と地温の通年変化—意外と暖かい雪の下—」(『はくさん』第 25 巻第 1 号) で紹介しています。

調査の結果、2006 年の白山山頂部の雪どけは、2005 年に比べ、13 日から 18 日遅れたと推定されました (表 1)。また、2005 年に雪どけが早いところは 2006 年でも早く、2005 年に遅いところでは 2006 年でも遅くなっていました。そして、クロユリの開花も雪どけの時期が遅れたのにあわせて、2006 年は 2005 年に比べ、10 日から 2 週間程度遅れていました。しかし、クロユリの

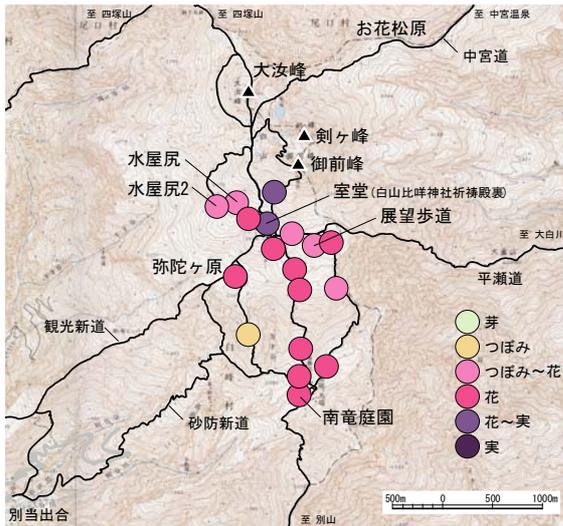
表 1 2006 年と 2005 年の白山のクロユリ 調査地の地表面温度センサーの温度変化日と 7 月中旬～8 月中旬の開花状況

2005 年

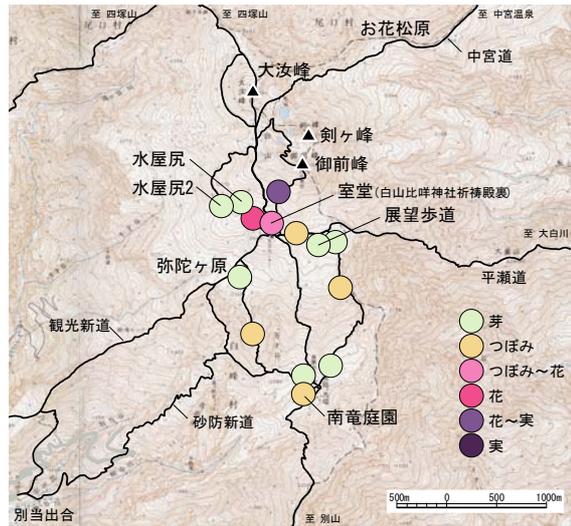
調査地	地表温度変化日	7.13～14	7.28～29	8.9～11	
神社裏 (標高2,450m)	6月7日	花	花～実	実	
南電庭園 (標高2,070m)	6月21日	つぼみ	花	花～実	
弥陀ヶ原 (標高2,340m)	6月29日	つぼみ	花	実	
水屋尻2 (標高2,450m)	6月30日	つぼみ	つぼみ～花	花	
水屋尻 (標高2,450m)	7月1日	つぼみ	つぼみ～花	花	
展望歩道 (標高2,440m)	7月7日	芽	つぼみ～花	花	

2006 年

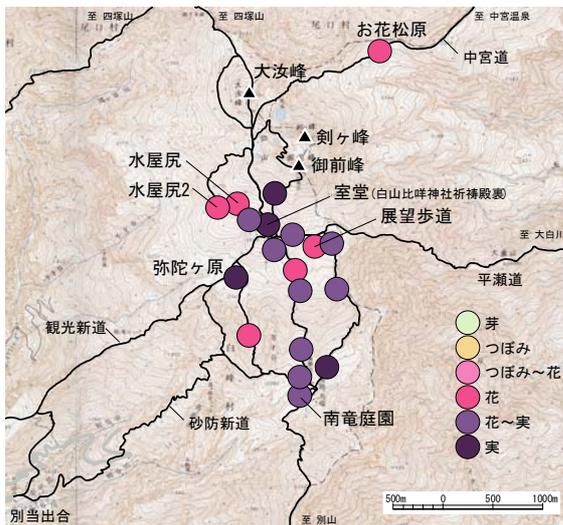
調査地	地表温度変化日		7.26～27	8.7～8	8.15～18
神社裏 (標高2,450m)	6月20日		つぼみ～花	花～実	実
南電庭園 (標高2,070m)	7月9日		つぼみ	花	花～実
弥陀ヶ原 (標高2,340m)	7月15日		芽	花	花～実
水屋尻2 (標高2,450m)	7月16日		芽	つぼみ	花
水屋尻 (標高2,450m)	7月18日		芽	つぼみ	花
展望歩道 (標高2,440m)	7月18日		芽	つぼみ	花



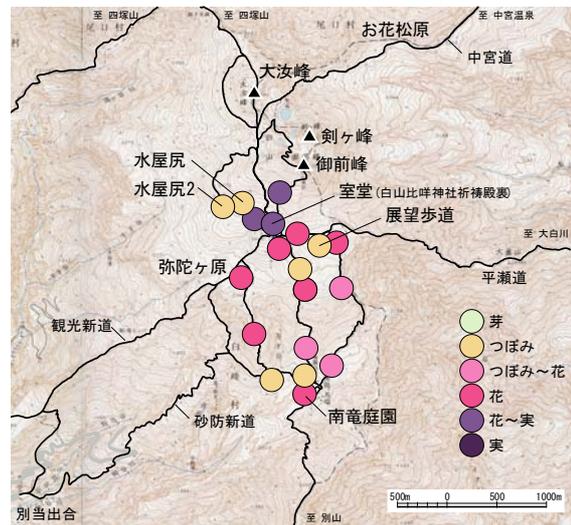
2005年7月28日～29日の開花状況



2006年7月26日～27日の開花状況



2005年8月9日～11日の開花状況



2006年8月7日～8日の開花状況

図1 2006年と2005年の白山のクロユリの主な分布地の開花・結実状況
国土地理院発行の25,000分の1地形図「加賀市ノ瀬」「白山」を使用

開花パターンに変化はなく、標高が低いほど早く開花するのではなく、雪どけが早いところほど、早く開花していました。

2005年と2006年の白山のクロユリの開花状況を図1に示しました。2006年は2005年に比べて全体的にクロユリの開花が遅くなっていることが分かります。また、どの場所で開花が早く、どの場所で遅いか、おおよそのことが分かります。室堂（白山比咩神社祈祷殿裏）では雪どけが早く、開花も早いのですが、同じぐらいの標高でも雪どけが遅い水屋尻や展望歩道ではまだ、芽を出したところです。その後の状況も雪どけが早い祈祷殿裏では他の場所よりも早く実になり始めますが、雪どけが遅い水屋尻や展望歩道などは実を付ける時期も遅くなります。同様にお花松原も標高は2,260mと室堂に比べ標高差で200mも低いのですが、残雪が多く残り、雪どけが遅いため、クロユリは比較的遅く花が咲き、実を付けるのも遅くなります。



写真1 展望歩道調査地のクロユリの状況
(2006年8月9日)

一部の個体は開花しているが、つぼみの個体もまだ、多い。



写真2 展望歩道調査地のクロユリの状況
(2006年8月10日)

ほとんどの個体が開花している。

また、展望歩道調査地では自動撮影装置によってクロユリの開花の様子を撮影しました。その結果、2006年8月10日にほぼすべての個体が開花している様子が撮影できました(写真1、2)。この場所では2004年、2005年にも開花日を特定することができていて、温度センサーによる雪どけ推定日の結果とあわせると表2のようになっており、2004年から2006年にかけて少しずつ雪どけ日が遅くなり、クロユリの開花日も遅くなっていました。

表2 展望歩道調査地の雪どけと推定日とクロユリ開花日

	雪どけ推定日	クロユリ開花日	開花までの日数
1994年	-	7月30日	-
1998年	-	6月29日	-
2002年	-	7月28日	-
2004年	6月28日	7月25日	27
2005年	7月7日	8月1日	25
2006年	7月18日	8月10日	23

クロユリ開花日平均：7月25日ごろ

1998年を除いたクロユリ開花日平均：7月31日ごろ



2007年の白山のクロユリの開花はどうなる？

2004年から2006年にかけて、白山のクロユリの開花は遅くなってきているということを紹介しましたが、2007年の白山のクロユリの開花はどうなるのでしょうか？

金沢地方気象台では1953年からソメイヨシノの開花日をはじめ、ウメの開花やウグイスの初鳴き、ススキの開花、イチョウの黄葉といった41種類の生物の記録をとっています。気象台によると、2007年には、すでにウメが2月13日に、ツバキが2月20日に、スイセンが2月9日に開花し、ウグイスが2月20日に初鳴きが記録されています。それぞれ平年値に比べると2週間から1か月早くなっており、豪雪だった昨年、2006年に比べると、ツバキの開花を除いて約1か月早まっていました(表3)。今年、2007年は記録的な暖冬といわれていますが、生物たちの活動もそれにあわせて早まってきているようです。2月中旬には、白山自然保護センター本庁舎(白山市木滑)周辺でも例年なら積雪があり、地面が見えるようなことはないのですが、すでに雪がとけ、フキノトウが顔を出していました。

表 3 2007年の金沢の生物季節観測の記録

種類	2007年	2006年	差	平年値	平年値との差
スイセンの開花	2月 9日	3月13日	-32日	3月 7日	-26日
ウメの開花	2月13日	3月18日	-33日	3月 5日	-20日
ツバキの開花	2月20日	2月20日	± 0日	3月 6日	-14日
ウグイスの初鳴き	2月20日	3月28日	-36日	3月24日	-32日

金沢地方気象台提供のデータから作成。平年値は1971～2000年までの累年平均値。

白山市白峰に設置してある積雪センサーの12月から3月までの積雪深の記録を見ると(図2)、3月末の積雪量が最も多かった2006年がクロユリの開花日が最も遅く、最も積雪が少なかった2004年がクロユリの開花日が早い結果でした。2004～2006年の3年のデータですが、3月末の積雪量が多いほどクロユリ開花日が遅くなっていました。白山麓の白峰は白山山頂から西方へ約13km離れており、また、標高も470mで、クロユリの開花している白山山頂付近とは積雪状況に違いはあるかもしれませんが、白峰の残雪状況と白山での積雪量やクロユリの開花にはある程度関係があると思われます。つまり、白峰で残雪が多い年には白山山頂部でも積雪が多く、雪どけが遅くなるため、クロユリの開花も遅くなっていると考えられ、逆に、白峰で残雪が少ない年には白山山頂部でも積雪が少なく、雪どけが早くなるため、クロユリの開花も早くなっていると考えられます。

また、展望歩道調査地でのクロユリの開花が6月29日と、例年より1か月も異常に早かった1998年は、白峰では3月上旬には雪どけを迎えています(この年のクロユリの開花については、「1998年の白山の積雪とクロユリの開花」(『はくさん』第27巻第2号)で紹介しています)。

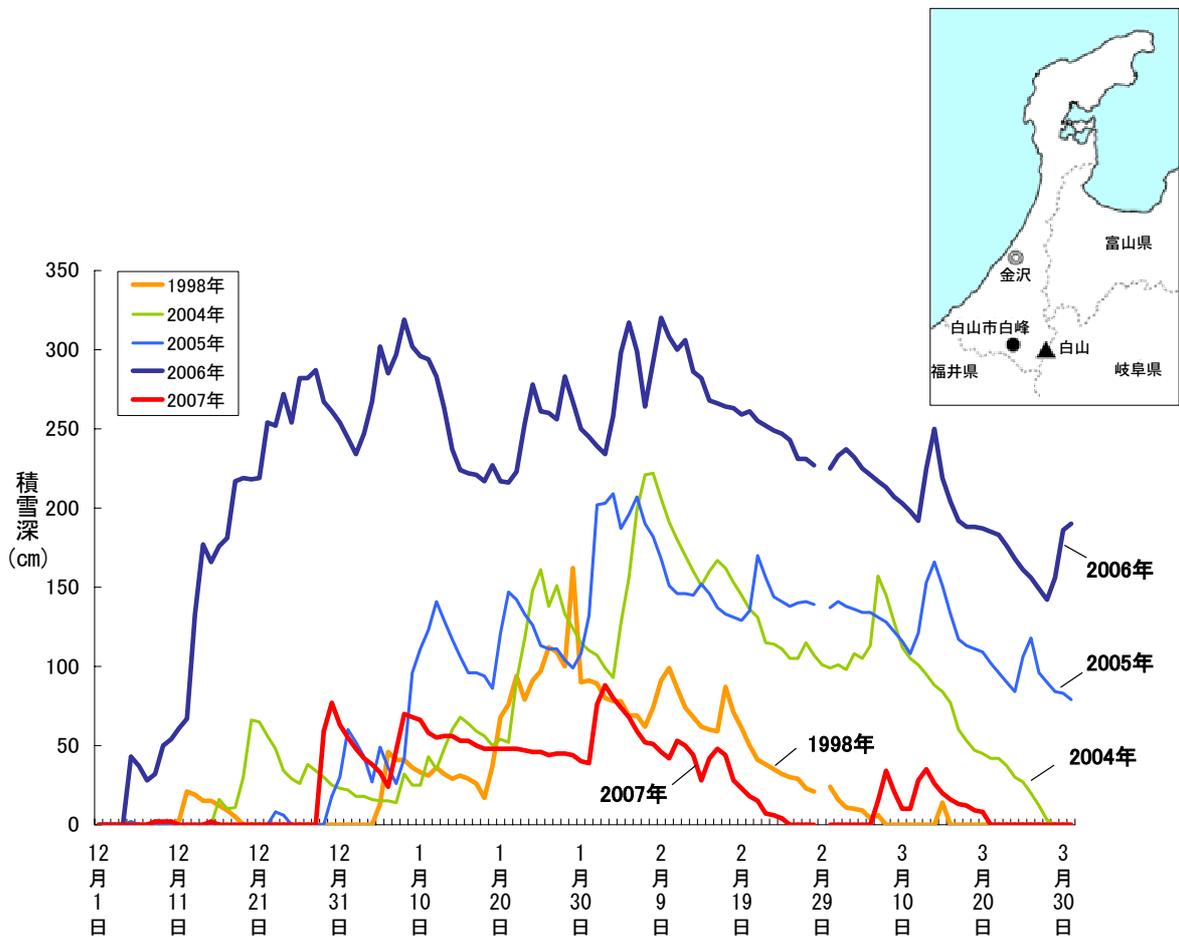


図2 白山市白峰の12月から3月までの積雪深の変化
石川県石川土木事務所資料より作成

今年、2007年は暖冬で、白山市白峰では2月下旬に雪どけしてしまい、どうなることかと思われました。その後3月に入り、積雪がありましたが、3月21日には雪どけを迎えていて、ここ数年では最も早い雪どけとなっています。山頂付近の雪どけは融雪期の降雨量にも影響され、雨が多いほど雪どけはすすみや早いと思われまますので、現時点では何ともいえませんが、4月や5月に降雨量が多ければ、白山のクロユリの開花は1998年の6月29日ほど早まらないにしても、ここ数年では最も早くなる可能性があります。

金沢のウメの開花日は、統計的に50年前より1か月ほど開花が早まっており(図3)、イロハカエデの紅葉日は、1965年以降のデータによれば1か月ほど紅葉が遅くなっています(図4)。開花や紅葉は気温に左右されており、気温が高ければ早めに開花し、逆に気温がある程度涼しくならないと紅葉はおきません。

最近、身近に感じられる温暖化の影響かと思われる事柄ですが、国際的な専門家によって組織されているIPCC(Intergovernmental Panel on Climate Change: 気候変動に関する政府間パネル)では、それまで温暖化が起こっている可能性が高いとしていたものを2007年の報告で初めて温暖化が起こっていると断定しました。白山山頂部での雪解けの早まりやクロユリなど高山植物の開花の早まりなども、温暖化の影響なのかもしれません。

地球温暖化は白山の動植物、地形などに多大な影響を与える可能性があります。温暖化を防止するためにできることを、一人ひとりが考え、今すぐに実行していくことが必要です。

今回の報告は、温暖化影響検出のモニタリング調査(国立環境研究所委託2004年度～)の一環で行った調査結果を紹介したのですが、白山自然保護センターでは今後も白山のクロユリの開花状況について調査を継続すると共に、調査結果はすみやかにインターネット等を通じ、お知らせしていきたいと考えていますので、登山の際の参考にしていただければと思います。また、1990年以前の高山植物の開花状況についての情報を集めています。撮影日、撮影場所がはっきりしているクロユリなどの写真や高山植物の開花記録などの資料をお持ちの方は、ご連絡下さい。

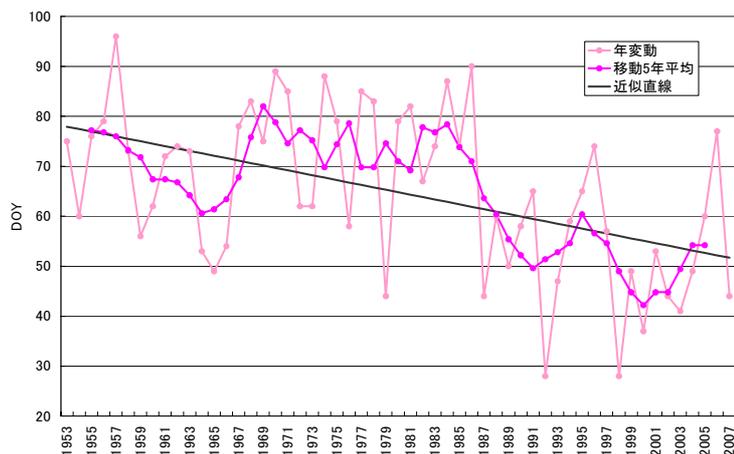


図3 金沢の梅の開花日の変化

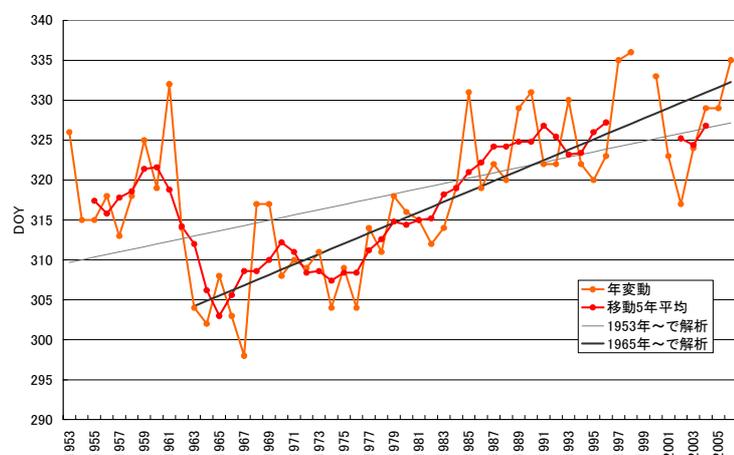


図4 金沢のイロハカエデの紅葉日の変化

図3、図4は金沢地方気象台提供のデータから作成。DOYはDay of yearの略で1月1日を1とした経過日数。DOY=50は2月19日。DOY=320は11月16日または11月15日(うるう年)。5年移動平均は当年と前後2年、5年分の平均。

白山麓からの北海道農業開拓民

府和正一郎 (石川地理学会)



石川県から北海道移民が多い

石川県は北海道への移住者が多い県です。屯田兵（ロシアの南下対策のための警備と北海道原野の開拓に当たった人々、家族と共に移住）の府県別移住戸数では石川県が404戸で第1位でした。明治8年(1875)から同23年まで士族限定で2,905戸が移住し、同24年からは平民にも開放され、明治32年(1899)までに4,432戸、合計7,337戸、家族人員数では39,911人に達しました。

さらに、北海道への農業移民が急増する明治25年(1892)～同39年(1906)の15か年間の累計でも石川県が第1位で22,902戸でした(表1)。明治25年から大正11年(1922)まで30か年の累計では石川県は40,521戸で、富山県の40,736戸(4位)と僅差で5位でした。

北海道庁の資料には、石川県からの農業移民は加賀南部、能美郡、江沼郡、河北郡からが多いことが記されており、なかでも白山麓に連なる山間地出身者の活動が高く評価されています。白山麓から遠く北海道へ渡った農業移民の特色を記します。

表1 北海道来住戸数累計の上位府県

明治25～39年			明治40～大正11年			明治25(1892)～大正(1922)年		
府県名	来住戸数(戸)	総数比(%)	府県名	来住戸数(戸)	総数比(%)	府県名	来住戸数(戸)	総数比(%)
石川	22,902	11.3	宮城	31,088	9.4	新潟	47,273	8.9
新潟	20,196	9.9	秋田	28,329	8.6	青森	46,668	8.8
富山	18,313	9.0	新潟	27,077	8.2	秋田	43,299	8.1
秋田	14,970	7.4	富山	22,423	6.8	富山	40,736	7.7
福井	13,116	6.4	岩手	20,209	6.1	石川	40,521	7.6
岩手	9,275	4.5	石川	17,619	5.3	宮城	39,050	7.3
全府県	202,110	100.0	全府県	329,189	100.0	全府県	531,299	100.0

『新北海道史第4巻通説三』より作成



白山麓旧鳥越村からの北海道移住

白山麓からの北海道移住について資料が多く残る白山市旧鳥越村を例に見てみます。旧鳥越村から北海道移住者が多い時期は、明治30年をピークとして明治27年～大正前期までが集中期で、その大部分は農業移民でした(図1)。これは北海道全体の農業移住集中期とほぼ重なります。

明治22年(1889)～昭和16年(1941)の約50年間に北海道へ移住した累計戸数を移住開始より約15年前の明治9年(1876)の『皇国地誌』にのる戸数

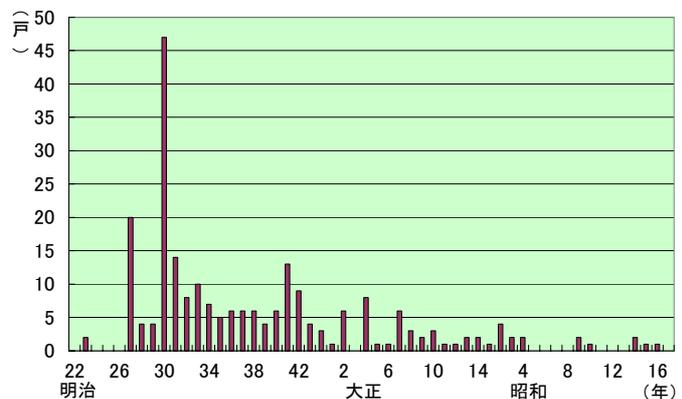


図1 旧鳥越村北海道移住戸数の年次変化
『続鳥越村史』より作成

表2 旧鳥越村における集落別北海道移住関連指標

旧村名	集落名	明治9年(1876)					E明治22年 (1889)~昭和 17年(1942) 北海道移住 戸数(戸)	E/A×100 移住率 (%)
		A 戸数 (戸)	B 人口 (人)	C 水田 (町)	D 畑 (町)	C+D/A 1戸当り 平均耕地 面積(町)		
別宮村	阿手	65	323	9.6	20.9	0.5	10	15
	数瀬	17	89	2.3	2.5	0.3	0	0
	三ツ瀬	5	26	0.3	3.6	0.8	0	0
	左礫	48	234	4.8	12.4	0.4	12	25
	渡津	41	209	7.5	23.6	0.8	27	66
	神子清水	56	335	1.7	24.8	0.5	11	20
	杉森	30	185	14.8	5.7	0.7	7	23
	別宮	67	395	14.4	21.1	0.5	10	15
	五十谷	27	158	6.2	5.3	0.4	1	4
	野地	16	93	3.3	5.6	0.6	4	25
	柳原	28	156	6.0	7.3	0.5	13	46
	相滝	34	204	10.0	11.9	0.6	8	24
小計	434	2,407	80.9	144.7	0.5	103	24	
吉原村	仏師ヶ野	27	138	0.5	7.1	0.3	2	7
	河原山	95	469	4.2	62.0	0.7	24	25
	三ツ屋野	58	307	0.1	41.2	0.7	10	17
	西佐良	24	115	0.0	29.1	1.2	2	8
	上吉谷	68	325	9.5	31.3	0.6	26	38
	下吉谷	64	347	10.5	52.9	1.0	17	27
	釜清水	38	186	1.0	39.4	1.1	3	8
小計	374	1,887	25.8	263.0	0.8	84	22	
河野村	出合	37	215	19.9	12.5	0.9	4	11
	三坂	43	217	16.0	11.8	0.6	1	2
	上野	82	424	32.5	31.2	0.8	15	18
	若原	30	157	8.5	5.2	0.5	2	7
	下野	44	242	17.7	7.2	0.6	5	11
	河合	77	369	36.4	11.6	0.6	7	9
	瀬木野	35	167	23.3	16.1	1.1	6	17
	広瀬	43	211	12.8	9.0	0.5	7	16
小計	391	2,002	167.1	104.6	0.7	47	12	
旧鳥越村全体	1,199	6,296	273.8	512.3	0.7	234	20	

『続鳥越村史』より作成

を基準に割合を出しました(表2)。旧鳥越村全体で234戸/1,199戸で20%となりましたが、村内の地域的特色を旧鳥越村が発足する明治40年以前の別宮村・吉原村・河野村の3村でみると(図2)、北海道移住戸数率は大日川上流部を占める別宮村が24%、手取川上流部の吉原村が22%、大日・手取川下流部の河野村が12%と金沢、小松から遠方ほど多いという特徴がありました。

さらに、集落別の推移を見ると、北海道の移住率が20%以上の集落は別宮村で12集落中7集落(渡津66%、柳原46%、左礫25%、野地25%、相滝24%、杉森23%、神子清水20%)と全体の6割を占め、吉原村では7集落中3集落(上吉谷38%、下吉谷27%、河原山25%)で全体の4割でした。河野村では8集落中、北海道移住率が20%を越える集落はありませんでした。最高でも上野の18%です。

山間地にあって平地が少ないがため、1戸当り平均耕地面積は小さく、しかも水田より畑の占めるウェートが大きい旧鳥越村の中で、山間奥地に位置する集落ほど平均耕地面積が小さく、生活する上で困難であり、そのため北海道への移住者が多かったと推察されます。



図2 白山市旧鳥越村の集落と旧3村
背景図は、数値地図20万の1地勢図「金沢」を使用。

開拓に政府が本腰を入れ始めた未開の北海道の大地に、新生活の夢をかけたのではないのでしょうか。これには北海道の情報が、北前船業が盛んな橋立、美川、安宅などから上流部の白山麓の村々へ魚肥、ニシン、昆布などとともにかなり正確に伝来したことも影響していたと思われます。

具体的な移住先を見ると明治24年から大正15年にかけて移住した207戸のうち、空知支庁が103戸で50%、後志支庁が24戸の12%、石狩支庁と十勝支庁が21戸で10%でした(図3)。

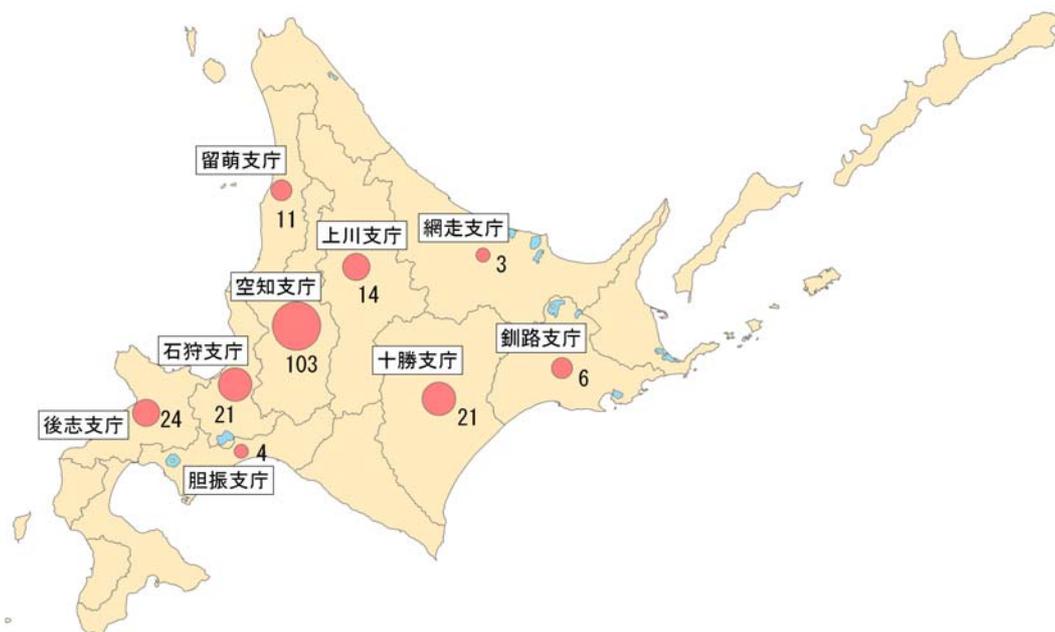


図3 石川県旧鳥越村民の北海道移住先
数字は戸数。『続鳥越村史』より作成。



白山麓農業移民を歓迎した北海道

明治19年(1886)北海道庁は、北海道土地払下げ規則を作り、農耕適地の払下げは10万坪(33ha)としますが、例外を認めたため、大農場が誕生します。こうして出来た大農場の経営者は旧藩主や華族、資本家で農場の働き手を小作人として募集します。農場といっても未開の原野で森林や草木が茂っているため、伐採、農耕技術にすぐれ、雑穀食も嫌わず、勤勉で忍耐強い北陸の農民、特に白山麓の人々が歓迎され、募集人が当時、白山麓に巡回してきたと記録に残されています(『吉野谷村史』)。

白山麓出身者が好まれたわけは、白山麓と北海道日本海側石狩方面の大農場との類似性が挙げられます。ひとつは気候にあります。両地方とも冬は積雪が多く、寒さの厳しい所でした。このため雪への対応に慣れていることが冬を乗り切る上で重要でした。もうひとつは食べ物にあります。両地方とも畑作が中心で、高価格米よりヒエ、ソバ、麦、豆類などを中心に栽培して食べていましたので食物上の違いが少ないこともその一つと思われます。そのほか白山麓の山間地では昔から預かり馬や駄馬の飼育が行われており、馬耕による北海道の農法に適応しやすかったこともあります。

また、白山麓の人々は真宗信仰が強く、道場の建設維持などに共同で力を合わせ、団結力があり、同郷人として共通の文化(言語、盆踊りなど)があるため、見知らぬ土地でも励ましあい辛抱がききました。原始林の伐採等山仕事も上手で、炭焼きなどによる副収入の道もありました。

大農場に入植した小作人は住居と開墾予定地、平均15,000坪(5ha)を与えられました。木を伐採、笹を刈って開墾した土地に種を播きます。家族総出の仕事です。北海道への渡航費、住居、1年目の食費、開墾費は農場で異なりますが計平均100円ぐらいでした。開墾料も1反歩につき75銭~3円と幅がありますが平均1円でした。当時、米1升は25銭ぐらいでした。



移民入植地の状況

『明治大正期北海道写真集』より転載



石狩川河畔奈井江原野（北海道空知支庁奈井江町付近）
旧吉野谷村・旧鳥越村民が多く入植した。『明治大正期北海道写真集』より転載

白山麓の移住者では小作人に支給される年間給与額が平均 100 円前後に対し、328 円の高島第一農場（空知支庁）、120 円の平安農場（石狩支庁）など有利な農場を選んで入植した人が多いことが注目されます。おそらく多くの希望者の中から白山麓出身者が優占的に選ばれた結果でしょう。

高島第一農場には白山市旧吉野谷村から 20 戸、旧鳥越村から 6 戸入植、高島第二農場（十勝支庁）には旧吉野谷村から 7 戸入植しました。旧鳥越村では高島第二農場入植と関連があった十勝河東郡芽室村へ 14 戸移住しました。そのほか空知支庁の鶉農場へ旧鳥越村から 3 戸、旧吉野谷村から 1 戸の入植がありました。このように大農場へ小作人として入植した人が多かったのです。



自立（自営）農を目指し団体移住

明治 26 年（1893）、北海道庁は団体移住者に申請許可された予定地を与え、5 か年の開墾実績で農家に土地が無償供与されることとなります。団体は最初 30 戸以上でしたが結成に困難が多く、同 30 年には 20 戸と制限が緩和され農業移住者が急増します。この状況を知り、明治 20 年代に渡航した農業小作者から自立農入植を目指し、故郷に帰り、団体移住者を募る事例がありました。

旧吉野谷村の農家出身の桑原権兵衛は、明治 29 年高島第一農場に入植していましたが留萌郡鬼鹿村トドコ原野に肥沃地を見つけ、同 32 年自営農家を目指し、農場内の同郷者 18 名（旧吉野谷村、旧鳥越村出身）とともに、不足分を旧吉野谷村から 6 戸、旧鳥越村から 6 戸をそれぞれ募集し、団体移住をなしとげました。団体規約をつくり、その中には相互扶助・儉約・団結をはかり、農産物の共同販売もしました。桑原権兵衛が立派であったのは、入植地の地味を前もって調べ、入植者に不平等が生じないように肥沃地と劣悪地をそれぞれ各戸に均等配分し、力を合わせて開墾した事です（『吉野谷村史』）。

桑原権兵衛とその団体（大殿子植民団体 42 戸）の開墾は、移住成功事例として、北海道庁発行の『殖民公報』第 68 号（大正元年 9 月号）に、加賀団体、石川県能美郡串村、長野村農民 32 戸が膽振国蛇田郡真狩村字曾寿慶入植、代表八反田角太郎、中島一郎と共に記載されています。

団体移住を成功させるには同郷人の協力による相互扶助と団結が道路や学校、神社、道場（寺）等の社会的な生活の維持に力を発揮します。そのために核となる公正無私の秀でたリーダーが必要でした。

すぐれたリーダーの1人である桑原権兵衛は大正4年（1915）7月に開拓功労者として北海道庁より表彰されています（「殖民広報」第85号、大正4年7月号記載）。

石狩平野の新篠津村（石狩支庁）で、後に水田耕作で成功した旧鳥越村出身の人々は、もともと現地しんしのつの平安農場に小作人として入り苦勞に耐え、昭和10年代に小作から開放され、石狩川排水路改良工事により豊かな農村となりました。後に子孫の方々が、父祖の地旧鳥越村を訪問しています（下、写真）。

また、家・田畑を処分して見知らぬ北海道へ挙家離村するのは危険です。親、兄弟の一部を残して現地へ渡り、2-3年後見通しがついた頃に残りの親族が移住するケースも多くみられます。



北海道新篠津村より旧鳥越村への訪問（平成15年10月30日）

写真提供：鳥越一向一揆歴史館



まとめ

白山麓からの農業移民は北海道開発の一翼を担いました。原始林・原野の開墾に白山麓の厳しい山間地の自然（豪雪、寒さ、傾斜地と狭い耕地）のもとで生産効率を上げるための工夫と労を惜しまない勤勉さ、人々の信仰心に裏付けられた団結と相互扶助、和の精神が優れたリーダーを選び、多くの困難を乗り越えて今日に至りました。

今日の成功は個人の努力、集団の団結力と共にこれを後押しした北海道庁の農政施策が開拓を進行させた効果もありました。豊かな現代に生きる私達にとって参考になる点も多くあると思います。開拓当時の苦勞や困難について詳しく触れることができませんでしたが、『続・鳥越村史』や『吉野谷村史』などの記録も機会があったら調べてみてください。新しい発見があると思います。



ブナオ山観察舎のキャラクター・かもちゃん

はくさん 山のまなび舎だより

白山まるごと 体験教室

かんじきハイキング ブナオ山観察舎

「かんじきハイキング」は2月18日、白山市一里野のブナオ山観察舎周辺で親子連れなど29人が参加して行われました。

今年は暖冬で雪は少なめでしたが、そこは奥山、一面の銀世界が待っていました。参加者は白山自然保護センター職員や白山自然ガイドボランティアの皆さんの案内で、かんじきをはいて森を抜け、雪原を歩き、ブナオ山が一望できる折り返し点まで約1.5kmを往復しました。途中、カモシカやノウサギ、キツネなどの足跡を観察しました。昼食場所ではかんじきをはいてのリレー「かんじき飛脚」、雪だるま作りなどに挑戦し、カモシカ3頭も目撃され、奥山の冬の自然を満喫しました。

冬の自然を体感



冬の森には楽しみがいっぱい



かんじきをはいて出発



何の足跡かな?



カモシカ、見つけた!

白山自然ガイド ボランティア

第3回研修講座 白山自然保護センター本庁舎

白山自然ガイドボランティア研修講座は昨年12月9日、白山市木滑の石川県白山自然保護センターでボランティアの皆さんが参加して開かれました。

講師のガイア自然学校（七尾市）代表・成田裕氏が「皆さんにとってガイドボランティアとは？」と問いかけ、参加者が「息抜きのため」などのそれぞれの思いを発表しました。その後、2グループに分かれて活動活性化のため具体的な提案や意見を出し合いました。

これに先立ち、白山自然保護センター主催の白山まるごと体験教室をはじめ、中宮展示館、市ノ瀬ビジターセンターの18年度の活動状況が報告されました。

活性化へ意見交換



ボランティア活動への思いを語り合う参加者



18年度の活動報告に聞き入れる参加者

伝えよう！白山の楽しさ

白山自然ガイドボランティア養成講座

石川県白山自然保護センターは中宮展示館や市ノ瀬ビジターセンターなどを拠点にガイドウォークなどの自然体験プログラムを実施しています。この活動のお手伝いをしてくださるボランティアを養成します。白山の自然を愛する皆さん、その自然の素晴らしさを伝える活動に参加してみませんか。

参加者募集



自然の不思議について話すガイドボランティア（一番左）

対象：大人（全3回の講座に参加でき、ボランティアとして自然体験活動に従事して下さる方）

日程：①5月19日（土）～20日（日） ②6月10日（日）
③7月1日（日）

集合：①白山国立公園センター（白山市白峰）
②市ノ瀬ビジターセンター（白山市白峰）
③中宮展示館（白山市中宮）

定員：30名

参加費：実費負担（①の宿泊・食事代など）

募集：4月19日（木）から

申込み：受講申込書の提出（問合せのあった方にお送ります）。

申込み・問合せ先：石川県白山自然保護センター

〒920-2326 白山市木滑ヌ4

TEL 0761-95-5321 FAX 0761-95-5323

E-mail: hakusan@pref.ishikawa.lg.jp

平成 19 年度石川県白山自然保護センター開催事業

いしかわ自然学校「山のまなび舎」

■白山まるごと体験教室 「白山を心と体で体験しよう」 要申込（約 1 か月前から）

回数	日時	タイトル	内容	場所（集合）	定員
①	5月13日（日） 9:00-15:00	ツキノワグマを 探そう	野生のツキノワグマ探しにチャレンジ。	白山市白峰（湯の谷） （市ノ瀬ビジターセンター）	30
②	7月29日（日） 9:00-15:00	化石で探る太古の 白山	化石や地層を観察して太古の白山について考えます。	白山市瀬戸（尾添川） （本庁舎）	30
③	9月22日（土） 13:30-16:00	秋の音、 ネイチャーコンサート	鳥のさえずりや川の音と野外での演奏。自然の中でいろいろな音を楽しみます。	白山市中宮（蛇谷） （中宮展示館）	50
④	10月14日（日） 9:00-15:00	トチノキとトチモチ	トチノキ観察とトチノキの実をトチモチとして食べるまでを体験。	白山市白峰（チブリ尾根） （市ノ瀬ビジターセンター）	30
⑤	2月17日（日） 9:00-15:00	かんじきハイキング	かんじきを履いて雪の上を歩きながらのアニマルトラッキング。	白山市尾添（一里野） （ブナオ山観察舎）	30

※③は中宮温泉旅館協同組合、④はネイチャープロジェクト白山と主催

■白山麓里山・奥山ワーキング 「白山をみんなで守ろう」 要申込（約 1 か月前から）

回数	日時	タイトル	内容	場所（集合）	定員
①	7月14日（土） 9:00-15:00	中宮道草刈り ボランティア	草刈り作業の体験を通して、白山の環境保全について理解を深めます。	白山市中宮（中宮道） （中宮展示館）	50
②	10月28日（日） 10:00-15:00	河原山カキもぎ ボランティア	放置されたカキもぎ作業を行い、サル・クマの侵入防止に役立ちます。	白山市河原山町 （白山自然保護センター本庁舎）	50

※①は中宮温泉旅館協同組合と主催

■県民白山講座 「白山を知ろう」 申込不要

回数	日時	タイトル・会場	内容	定員
①	6月16日（土） 13:30-17:00	白山登山と高山植物の集い ・ 白山市民交流センター	白山登山の心得や白山の自然について紹介します。	200
②	8月25日（土） 13:30-16:00	白山国立公園と登山者 ・ 石川県立生涯学習センター	登山者の利用動態など調査成果を紹介し、白山の保全のために登山者ができることを考えます。	200
③	11月10日（土） 13:30-16:00	里山の暮らしと身近な生き物 ・ 白山市民交流センター	里山の変貌はそこを住処としていた身近な生き物の生息にも影響を及ぼしていることを紹介します。	100

※①は石川県自然解説員研究会と主催、白山市と共催。③は白山市と共催。

■ガイドウォーク・ミニ観察会 「遊び心で歩こう」 申込不要

中宮展示館・市ノ瀬ビジターセンターでのガイドウォーク

- ・ 白山自然ガイドボランティアや職員が中宮や市ノ瀬の自然を案内。
 - ・ 日 時：5月～10月の土・日・祝日の 10:00-12:00、13:00-15:00 の間で 1-2 時間程度
- ブナオ山観察舎ミニ観察会

- ・ かんじきを履いて雪山を歩き、自然を観察します。
- ・ 日 時：12月～4月の土・日・祝日の 10:00-12:00、13:00-15:00 の間で 1-2 時間程度

<編集・谷野一道>

センターの動き（1月1日～3月31日）

- | | | | |
|-------|----------------------------------|---------|-----------------------------|
| 1.22 | 石川県民大学校実施機関連絡会議（金沢市） | 3.8 | 大阪シニア大学案内（ブナオ山観察舎） |
| 1.24 | 石川森林管理署新庁舎落成式（金沢市） | 3.9 | 大阪シニア大学案内（ブナオ山観察舎） |
| 1.27 | 野々市町教育委員会案内（ブナオ山観察舎） | | 白山国立公園外来種対策事業検討委員会 |
| 1.28 | 環白山保護利用管理協会総会（白山市） | | （環境省主催）（白山国立公園センター） |
| 2.5 | 白山外来植物対策検討会（金沢市） | | 福井県・石川県「自然保護センター」連絡会議 |
| 2.8 | 白山砂防女性特派員活動会講座（本庁舎） | | （本庁舎） |
| | 北陸地域鳥獣害対策担当者会議（金沢市） | 3.11 | ボーイスカウト金沢第22団案内 |
| 2.9 | 温暖化影響検出モニタリング調査年度末成果報告会（つくば市） | | （ブナオ山観察舎） |
| 2.10 | 白山市都市交流課案内（ブナオ山観察舎） | 3.12 | 大阪シニア大学案内（ブナオ山観察舎） |
| 2.18 | 白山まるごと体験教室「かんじきハイキング」（ブナオ山観察舎） | 3.17 | 石川県自然解説員研究会総会（白山市） |
| 2.19 | 特定鳥獣保護管理計画検討会（金沢市） | 3.17-18 | 環白山保護利用管理協会設立記念シンポジウム |
| 2.23 | 輪島市町野小学校案内（ブナオ山観察舎） | | （郡上市） |
| 2.25 | ボーイスカウト金沢第6団案内（ブナオ山観察舎） | 3.19 | 白山カモシカ保護地域管理指導委員会 |
| | | | （福井市） |
| 3.1-2 | 身近な自然（里山）の生態系モニタリング調査結果報告（富士吉田市） | 3.20 | 白山自動車利用適正化連絡協議会幹事会 |
| | | | （本庁舎） |
| 3.3 | 美川緑の少年団案内（ブナオ山観察舎） | 3.22 | 白山外来植物対策検討会（金沢市） |
| 3.4 | 大阪シニア大学案内（ブナオ山観察舎） | | 白山国立公園環境共生計画調査業務第2回検討会（金沢市） |
| | | 3.25 | 白山市ファンクラブ案内（ブナオ山観察舎） |

編集後記

去る3月25日、石川県能登半島沖で大規模な地震が発生しました。最大震度6強を観測した地震は「平成19年能登半島地震」と命名され、連日メディアから倒壊した家屋や被災されたみなさんの生々しい姿が伝えられました。幸い、白山麓においては、これといった大きな被害が見つかっていませんが、地震が起こった時の突き上げるような揺れとその後の大きな横ゆれは、人々の体にしっかりと刻み込まれました。その後の余震も不気味でした。

去年は「平成18年豪雪」による雪の被害が深刻でしたが、今年は大規模な地震が発生するなど、このところ、自然の脅威を感じさせる事件が県内で続いています。被災された皆様には心からお見舞い申し上げます。

4月以降の当センターの開催行事が決まりました。白山の自然に親しむ体験プログラムや白山の自然について学ぶ講座を開催しますので、皆様の参加をお待ちしています。また、今年当センターの自然体験活動に従事していただくボランティアの養成講座を開催します。興味のある方、当センターまでご連絡ください。（小川）

目次

表紙 白山麓の風景ーアジメドジョウの熟れ鮎	林 哲	1
平成18年豪雪と白山のクロユリの開花の遅れ	野上 達也	2
白山麓からの北海道農業開拓移民	府和正一郎	7
はくさん 山のまなび舎だより	谷野 一道	13

はくさん 第34巻 第4号（通巻142号）

発行日 2007年3月30日（年4回発行）
 編集発行 石川県白山自然保護センター
 〒920-2326 石川県白山市木滑ヌ4
 TEL. 0761-95-5321 FAX. 0761-95-5323
 URL <http://www.pref.ishikawa.jp/hakusan/>
 E-mail hakusan@pref.ishikawa.lg.jp
 印刷所 前田印刷株式会社